



ウェーバーの技術的批判(五百簀頭真治郎博士追悼 號)

宮田, 喜代藏

(Citation)

国民経済雑誌, 98(5):23-34

(Issue Date)

1958-11

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/80040645>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/80040645>



ウェーバーの技術的批判

宮田喜代藏

は し が き

マックス・ウェーバー Max Weber が経済学の研究方法のうえにもたらした数々の貢献のうち、科学的認識の客観性を護るために科学の領域から価値判断を排撃したことは特筆されてよい。洵にそれは近代資本主義の発達を基盤として促された学問的自己反省のうちで成し遂げられた経済学の基礎づけの一つの仕事として評価される。しかるにこの近代資本主義それ自身がようやく変貌の段階に入ると、これを基盤として経済学に新しい自己反省が起り、いまやこの現代的段階に立つてウェーバーが検討されて来た。ここでは彼の論文「社会科学の及び社会政策的認識の客観性」⁽¹⁾について、彼の技術的批判の思想を吟味してゆく。

一 技術的批判の検討

本論文の第一節は、経済学の科学としての要請と実践的要請との関係を明かにすることを意図している。しかるにこれに先立つ「開題」においてはまず、経済学の目的と手段の限界との矛盾を示唆して曰う。『この雑誌の標榜⁽²⁾している目的

は、「いつさいの国の社会的状態」すなわち社会生活の事実の認識を拡大することと並んで、社会生活の実践的問題に対する判断を習練すること、従つて実践の社会政策的仕事を批判し、進んでは立法的要因を批判することである。しかしそれにも拘らずこの雑誌は初めから専ら科学的雑誌たらしめし、只科学的研究の手段をもつてのみ仕事をして来た。そこで第一にこういう問題が起る。かの目的——実践的問題を批判するという目的——と科学的手段にのみ限定するということは如何にして原理上結びつけられるであらうかということがこれである。『立法及び行政の方策、或いはそれに対する実践的提案の価値を判断 beurteilen するとき、それはどんな意義をもつているか、またその規範は何であるか、評価する者が自分で表明するところの、又は実践的提案をする者が、その基礎においている価値判断の妥当性はどんなものか。このさい彼はどんな意味で科学的説明の地盤に立っているのか。何故ならば、科学的認識の指標は、認識成果が真理としても「客観的な」妥当性のうちに見出されねばならぬからである。われわれは先ずこの問題に対するわれわれの立場を明かにし、そののち如何なる意味で文化生活一般の諸科学の基礎において「客観的に妥当な真理」が存するかという問題を結論する。』⁽³⁾ 以上において経済学はその目的をば実践的問題の批判においているが、しかしそれ自身としては科学的手段にのみ限定されることを示していると解される。

そこでウェーバーが経験科学のなしうる課題として取上げている技術的批判の主張に聴くこととしよう。『拘束力をもつ規範が理想を発見し、それから実践に対して処方箋を導き出すことは、経験科学の課題とはなりえない。』しかしこのことから『価値判断は究極において一定の理想に基くものであり、従つて「主観的」な根源をもつものであるから、科学的討論から一般に価値判断が排撃されるという帰結を出してはならない……問題はむしろ理想や価値判断の科学的批判とは何を意味し、何を目的とするかということにある。』『意味をもつた人間行為の究極的要素について行われる思惟的省察はいずれも先ず「目的」と「手段」との範疇に結びついている。われわれが具体的に何かを意欲するのは「そのもの自体

の価値のため」か、若しくは究極において意欲されたものに役立つ手段としてである。しかるに科学的考察の取扱いは、先ず第一に与えられた目的における手段の適合性の問題である。われわれは如何なる手段がある構想された目的に到達するのに適合しているか、或いは適合してないかを妥当的に確立する Feststellen ことができるから、われわれはこの方法で処分しうる一定の手段をもつて一般にある一定の目的を達成する諸々の機会 (可能性 Chancen) を評量し、且つそれゆえ間接には目的設定そのものをば、その時々^々の歴史的情況に基き実践的の意味であるとか、或いはしかし与えられた事情によつては無意味であるとか批判することができる。さらに若しも或る与えられた目的への到達の可能性が与えられているようにみえた場合には、必要な手段の使用が全事象の全連関に基いて、所期の目的の達成のほかに如何なる諸結果をもたらすであろうかということをも確定することができる。そこでわれわれは行為者をして彼の行為から生ずべき意欲された結果と意欲されなかつた結果とを秤量することを可能ならしめ、これによつて所期の目的の達成が予見されうべき他の諸価値の毀損という形で何を「犠牲にする」かの問いに答を与えることとなる。大多数の場合にいかなる追求される目的もこの意味で何かを「犠牲にする」若くは少くとも犠牲にしうるものだから、責任をもつて行為する人間の自省は、行為の目的と結果とを相互に対比して秤量することを避けて通ることはできない。そしてかかる秤量を可能ならしめることは、技術的批判 technische Kritik の最も主要な職能の一つである。さてしかしかの秤量そのものを決定にもたらしめることはもとよりもはや科学の可能な課題ではなく、意欲する人間の課題である。彼は自己の良心と彼の個人的な世界観に従つて、ここに問題となつている諸価値の間を秤量し、且つ選択する。科学は彼を援けて一切の行為が、勿論また事情によつては不行為が、結局において一定の価値へ味方することを意味し、従つて原則として他の価値に敵対することとなるということ意識せしめることができる。諸価値間の選択を行うことは意欲する人間の仕事である。』⁽⁴⁾

この説明のうちから、ウェーバーは社会科学の認識の客観性を護るために、経済学から価値判断を排撃し、技術的批判

のみを許容していることを理解しえたが、このことは二つのことを意味している。

第一、経験科学としての経済学の任務は、自ら価値判断することではなく、単にかかる価値判断を「批判」することに存している。或る行為を實踐しようとして決意することも、またある行為の手段と結果とを相互に秤量すること自身も、経済学の任務ではなく、それらは単に意欲する人間のみのなしうるところである。経験科学のなしうるところは、ただ与えられた目的に対する手段の適合性を確立することによつて、かかる相互秤量を可能ならしめる「技術的批判」にのみ限られている。

いま行為の目的と結果との相互秤量を可能ならしめることは、技術的批判の最も主要な機能であると認められているが、しかしかかる技術的批判に援けられて現実の秤量を行うこと自身は、もはや科学のなしうる課題ではなく、それは意欲する人間の課題である。なぜならば、技術的批判は一定の目的、価値理念を所与として前提したうえ、ある手段がこの目的達成に適合しているか否かの判断を可能ならしめるものであるが、それが合理的手段であるという現実の判断を下だすためには、今迄与えられたものとして前提されていた目的そのもの、価値理念そのものの合理性が検討され、是認されねばならぬ。そしてこうした目的・価値理念そのものは、科学のなしうる可能な課題ではないということが含意されているからである。

ある手段が与えられた目的の実現に適合していること、及びその効果と犠牲とを相互に秤量することを可能ならしめることは科学の機能であるが、こうした秤量そのものを決定にもたらすことは、もはや科学の任務ではない。ただし、科学としては特定の目的そのものの正否を判断しえない限り、それを前提とする手段の合目的性—合理性を現実判断することは不可能である。かくみてくるとウェーバーが経験科学が客観性を失うことなくして為しうる課題として許容している技術的批判なるものは、意欲し行為する人間が現実特定手段の合目的性及び合理性を現実判断するということでは

なく、行為者の行いかかる手段の合理性の判断を可能ならしめ、この現実の判断を援助することであることが理解される。経験科学が客観性を保ちつつなしうるところは、実践的な行為者の価値判断を可能ならしめ、これを援助する謂わば検証的批判であるといふことができる。

第二、経験科学の世界において許容されうるところは、或る手段のその目的に対する適合性を判断する技術的批判を可能ならしめる科学的批判たる「技術的批判」のみである。したがつて倫理的価値判断及び世界観による価値判断のごときについては問題とならえない。これによつて当時ドイツにおける風潮たりし経済学を倫理科学として取り扱う学派に対し、また他面経済学が世界観に囚われた政策論に墮することを排斥して、経験科学としての経済学の限界を明かにしている。それではウェーバーの技術的批判に現われている技術的といふことは何を意味しているのであろうか。

第一、直接には、与えられた目的に対して如何なる手段が適合しているかという手段の適合性、すなわち手段の合目的性を批判することができる。そしてこのことから第二に、間接には、目的設定そのものが客観的情勢からみて実践上有意味であるか否かを批判することができる。これは手段の側よりする限定的制約性からみて、目的そのものの有意義性、すなわちその目的の実現可能性の批判であると言える。第三に、与えられた目的に対する手段が、所期の目的の達成のほかに如何なる諸結果をもたらすであらうか、すなわちどんな犠牲を伴うかを確定することができる。

第一は、一定の手段のもつ目的実現可能性から進んで目的適合性すなわち合目的性を、第二は、一定の目的の実現可能性を取扱うもので謂わゆる純技術的批判 *technologisch* であるのに対し、第三は、或る目的のために必要な手段の使用されるとき、全事象の全体的連関に基いて所期の目的とそのための犠牲とを比較秤量するもので、その手段の合理性を取扱う謂わば本来の技術的批判 *technisch* である。

いま「技術」*Technik* とは、或る一定の目的に対しての正しい道 *rechtes Weg zum Zweck* を見出すことに關係している。

ウェーバーの技術的批判

ここに一定の目的に対する正しい道とは、前段階では一定の手段について特定の目的を実現しうる「可能性」から進んで「合目的性」が、後段階ではその「合理性」が保障されていることを意味する。それゆえ技術性ということとは、こうした可能性・合目的性・合理性なる三つの要因を統一したものである。⁽⁵⁾

第一は、ある手段が特定の目的を達成しうる「可能性」Möglichkeit 第二は、ある手段が特定の目的を達成しうるに適合している「合目的性」Zweckmässigkeit であつて、ウェーバーのいう目的適合性である。第三は、ある手段が特定の目的を達成するに当つて生ずる効果と費用との比較秤量を行うとき、その手段の「目的合理性」Zweckrationalität が判断される。ウェーバーが『全事象の全連関に基いて、所期の目的の達成の外に如何なる諸結果をもたらすであろうかを確定することができる』と説き、またそのさい『所期の目的の達成が予想されうべき他の諸価値の毀損という形で何を犠牲にするかを秤量する』と説明しているところからみて、彼の技術的批判における技術的なるものの意味するところは、この第三の目的合理性をも含んでいると解することができる。これを要するに、ウェーバーの技術的批判において批判の対象として取上げられているものは、特定手段の特定目的の実現に対してもつ可能性↓合目的性↓合理性を含む技術性であることが理解される。それでは経験科学としての経済学が、その認識の客観性を害することなくして行いうる科学的批判なるものは、ウェーバーの考えているように技術性を対象とする技術的批判のみに限らるべきであろうか。この点においては、技術的批判によつて限定的制約をうけながら行われる経済的判断を対象とする経済的批判も亦、経験科学の任務として許容されるものである。

ここに経済的判断というとき、その謂うところの経済的なるものとは何を意味するのであろうか。経済の理念は、欲求と充当との持続的調和なる特殊精神において一切の生活事象を統一的に秩序づけていかに生活体を構成するかという根本問題のうちに把握される。個々の生活行為の実行に際してその成果を確保せしめるよう秩序づけることのように技術の

意味がくみとられるのに対して、こうして技術的に秩序づけられている一切の生活行為を相互に正しい関係にもたらず全体的な秩序づけのうちに経済の意味が把握される。しかるときは、技術的判断が一定の手段が特定の目的に対してもつ手段—目的の間における、合目的性↓合理性を保障しているか否かを内容として、経済的判断は一切の目的と一切の手段との全体的関連において、一切の生活行為を統一的に秩序づける経済への構成行為がよく存立と持続とを確保しているか否かの判断を内容としている。それゆえ経済の本質を生活への構成として把握する立場からすれば、経済的判断は、経済をば特定の目的の手段たる地位において取上げ、この目的の実現のためにいかに適合しているかの目的論的判断に止まるべきではなく、生活への構成の成果たる社会構成体をそれ自身目的として取上げ、この社会構成体をば構成体それ自身の存在の仕方から正しさを判断する存在論的判断たる性格をも具うべきである。⁽⁶⁾しかるにこの存在論的判断は、経験の基盤のうちに深く根を下しているものであつて充分に客観性をもつものであるから、経済的判断は経済学の客観性を害することなくしてなお能く科学の領域に取入れられうるものであると言へる。そのうえ技術的判断によつて個々の行為の合目的性↓合理性が明かにされるのみでは、未だそれが具体的に実行されることを保障するには足りない。進んで存在論的判断によつて、一切の生活行為の統一的秩序づけによる生活への構成の正しさが明かにされてはじめて、一切の生活行為及びこれを統一的に秩序づける生活への構成を具体的に実行するという実践性が保障される。ウエーバーは、その論文の最初において、経済学の目的を実践的問題の批判におきながら、他面その認識の客観性を護るために、それ自身としては科学的手段にのみ限定せねばならぬとして、技術的批判以外の価値判断を排撃したものであつた。従つていま存在論的判断ないしその批判にして科学の客観性を害することなくして、なお実践性の要請をも充たしうる事が可能であるとするならば、ウエーバーも亦こうした経済的批判をば経済学の領域内において許容すべきものと解することができる。

二 科学的認識の客観性

茲においてわれわれはウェーバーがこの論文の結論として到達した経験科学の客観性とはどんなものであるかを聞こう。『いつさいの経験的知識の客観的妥当性は、与えられた現実体が或る特殊の意味において主観的な、すなわちわれわれの認識の前提を表現するところのものとして、その経験的知識のみがわれわれに与えうる真理の価値の前提に結びついているところの諸々の範疇に従つて整序されるということに、そして単にそのことのみ基いている。……経験的・社会的文化科学の領域においては、事象の限りなき豊かさの中でわれわれに対して本質的なもの意味充分な認識の可能性は、種別的に特殊化された性格の諸々の観点の絶えざる利用に結びつけられている。この観点は結局は価値理念によつて整序される。この価値理念そのものは確かに意味ある一切の人間行為の要素として経験的に確認され且つ体験されるが、しかし経験的素材からしては妥当なるものとして根拠づけられない。むしろ社会科学的認識の「客観性」は、経験的所与はつねに価値理念——これのみが社会科学的認識に認識価値を与える——に基いて規整され、この価値理念からその意義が理解されるのではあるが、しかも認識の妥当の証明という経験的に不可能なことのための足場とされることは断じてない、という事柄に依存するのである。そしてわれわれはすべて自己の生存の意味を結びつけている究極最高の価値理念の超経験的な妥当性を何らかの形で心の中に信じているのであるが、この信念、Glaubenは、経験的実在がそれによつて意義をうるところの具体的諸観点の絶えざる変動を斥けるものではなく、かえつてこれをも含んでいる。』

以上明かにした本論文の結論は、価値理念の妥当性は超経験的なものであるから、これを証明することは、経験科学としてはその客観性を害することなくしては不可能であると言うことにある。そしてこの結論のうちには二つの主張が含まれている。

第一は、社会科学の領域においては、その対象とする経験的所与は価値理念に基いて整序されるということである。わたくしも科学的認識が、一定の理念に嚮導されながら経験対象を整序することによつて可能であることは承認する。これが謂わゆる価値關係的な認識であり、これは経験科学がその客観性を害することなくしてよくなしうるところである。

第二は、しかしこの価値理念そのものの妥当性は超経験的なものであるから、これを証明することは経験科学の客観性を害することなくしては不可能であるという主張である。いま価値理念の妥当性をば形式的な論理的妥当性と解するならば、それは超経験的なもの、謂わば先天的なものであるが、そうであるとしても、その理念が経験的な事実によつて基底づけられている *faktisch fundiert* という本質的な關係を看過してはならない。われわれは科学的認識を嚮導する理念 *leitende Idee* が先天的な妥当性をもつていることを承認するが、しかしその理念そのものが経験を超越して先験的に与えられた範疇であるとみるべきではなく、それは経験的事実を基底とし、これに即して直観されたものである。しかし他面、この理念は経験される事実ではなく、それとは原理上明別される存在であることは言うまでもない。そうである限り、理念の妥当性を事実基底性において証明することに対して、経験科学がある意味において援助を与えることは認めねばならぬ。

われわれはさきにこのウェーバーの論文において、経験的知識の客観的妥当性が一定の価値理念に従つて、整序されていることに基いていと説明されているのを見た。すなわち科学的認識の客観性が価値理念に係わつて整序されてはじめて保障されると説かれていることを知つた。しかしこれによつては単に経済学的認識の論理的な客観的妥当性が保障されたとというに過ぎない。経験される事象の多種多様性が一定の価値理念に嚮導されるとき科学的認識の客観性が保障されるというならば、かかる客観性は形式的な論理的客観性たるにすぎないであらう。こうして保障される経験科学的認識の正しさは広義の「論理的正しさ」として把握され、これは経験科学の客観性を形式論理的に基礎づけるものであ

る。

次いで、ウエバーの主張する技術的批判の内容をなすところの、一定の手段の特定の目的に対する合目的性→合理性に関する目的論的判断も亦客観性を有し、それは経験科学の領域において許容される。

しかしわれわれは、かかる目的論的判断と並んで存在論的判断を取上げ、両者ともに科学的認識の客観性を害することなく科学の領域のうちに取入れることを許容しうるものと考ええる。しかしこのさいウエバーが経験科学の領域内において技術的批判以外の価値判断を強く排撃した論拠は十分に顧慮せねばならぬ。それゆえわれわれが科学的認識の客観性を害することなく、科学の世界に取入れうるためには、この存在論的判断の実質的客観性を立証しうる条件を充たすことが必要である。

まず第一に、この存在論的判断の対象である生活への構成によつて成立した社会構成体の現実、在をば、判断の基準たる価値理念・構成体の本質の具体的に顕現したものであるとの関連において理解することが必要である。第二には、この存在論的判断の基準をなす価値理念・社会構成体の本質そのものをば、生活への構成によつて成立する社会構成体の現実在によつて基底づけられているものとしての関連において把握することが必要である。若し存在論的判断の基準たる構成体の理念にして生活の現実在による基底づけを欠くところの単なる抽象的概念にすぎないものであるならば、これを基準として行われる存在上の正しさの判断は、実質的客観性を欠くこととなる。しかしこの構成体の本質・理念にして、その現実在を基底とし、そのものうちに根源的に諦視されるその本質であるとすれば、存在論的判断はその実質的客観性を保障されることとなる。⁽⁸⁾

しかるに経済を生活として把握するという本質観に立つ限り、経済を生活への構成として出来上つたそれ自身一つの生活体としてみるという以上の見解からさらに進んで、経済をば人間共同生活の広い全体的な領域の内部における一つの部

分領域たる地位、及び一つの部分構成としての職位において把握する。しかる限り、十全の意味における経済的判断は、生活への構成において出来上つた社会構成体の「構成上の正しさ」において判断されることから進んで、人間共同生活の全体的領域のうちにおいて如何に正しい地位を占め、正しい職位を果しているかという「生活上の正しさ」において判断することを併せ含む存在論的判断たる性格をもつものと言へる。

む す び

われわれは、第一は、ウエーバーの技術的批判の主張を検討することによつて、客観性を要請する経済学の領域において許容されるものとして彼の謂う技術的批判と並んでさらに経済的批判の可能であることを明かにした。第二に、ウエーバーの科学的認識の客観性の主張を吟味することによつて、われわれは技術的批判から存在論的批判にまで進むことによつて、科学的認識の客観性を深い意味において実質的に保障しうる可能性を明かにした。そこでわれわれは進んで経済学が経済的批判をとり入れ、しかもこれを存在論的批判としてとり上げるとき、ここにはじめて科学的認識は論理的な客観性のうえに、存在論的な客観性をかちうることを主張した。

しかもかかる主張をなすに当つては、科学的認識の嚮導目標たる価値理念そのものが経験的事実によつて基底づけられていることが必要であるという条件を明かにした。

まことにウエーバーの経済学は、近代的合理主義の基調のうえに立ち、この立場を徹底的に押し進めたものである。彼は大著『経済と社会』⁽⁹⁾においては、近代資本主義の特徴として資本計算の合理性を力説し、また科学方法論においては科学の専門化的合理性を高調し、いづれにおいても近代の時代の運命として徹底した分裂主義的合理化の傾向を浮び上らしめている。ウエーバーの主張を貫くこうした分裂主義的合理性の特質こそ、近代的な資本主義的自由経済体制の特質を最

も顯著に表わしているものであると言える。しかるにかかる資本主義の変貌を基盤として、最近においてはそれのもつ分裂主義的合理性を清算して新しく綜合主義的合理性に志向する現代的な経済体制に向わんとしている。それは狭い経済の固有の内部に踟躇している限り、近代の意味においては経済的非合理主義なりと評されるかも知れないが、しかし広い生活としての経済の立場に立つとき、かかる綜合的合理性は生活的合理性としての経済的合理性を保障するものである。

なお他面、こうした経済的批判は、ウェーバーのいう技術的批判を基礎的前提としながら、一切の生活行為の統一的秩序づけの成果たる社会構成体の存在上の正しさを判断することにまで進むことが可能となる。かく技術的批判から存在論的批判に進むことによつて、経済学的認識はその客観性を実質的に深めるとともに、なお同時にその実践性をも保障することができる。そしてこれによつて経済学をば理論科学にして同時に実践科学として基礎づけんとする現代的段階の要請に応える一つの道を開くことができる。

註(一) Weber, Max: Die "Objektivität", sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis, 1904

現在在 Gesamte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, 1922, S. 146 ff. に収録されている。富永祐治・立野保男共訳 マックス・ウェーバー『社会科学方法論』昭和十一年 岩波文庫

(2) この雑誌とこののは 'Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik.' の論文は同誌 Band 19, 1904 に所載。

(3) Weber: a. a. O. S. 147-8. 邦訳 九一〇頁

(4) Weber: a. a. O. S. 149-50. 邦訳 一四一六頁

(5) 宮田喜代蔵著『経営合理化の原理』昭和二十四年 七一八頁

(6) 宮田喜代蔵稿『経済学における存在論的判断』神戸大学『経済学研究 第五号』昭和三十三年 一四頁以下

(7) Weber: a. a. O. S. 212-3. 邦訳 一〇五一六頁

(8) 宮田稿『経済学における存在論的判断』五八頁以下

(9) Weber: Wirtschaft und Gesellschaft, 1922, S. 95.